
百の愚図と一的意思

孤島流人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百の愚図と一の意味

【Nコード】

N0582Z

【作者名】

孤島流人

【あらすじ】

十二月二日（1）

PDF縦読み推奨……したいけど文字がずれてる、なんでやねん。

秒針の足音は隣部屋の洗濯機にかき消された。否や下校する学生らの叫声が窓を突き破って部屋に響く。すっかり外は夕焼けである。隣人の衣服をこねる水流や若者のエネルギーギッシュはしかし彼女の耳には入らない。

女性は部屋のスミで三つ折りにした敷き布団に顔を埋め、ひっそりと存在感を沈めていた。手足は力なく投げ出され微動だにせず、それは呼吸すら行っているか疑わしく、それが無機物なのではないかと見紛ってしまうほどの凍結ぶりであった。彼女は疲弊し泥のように眠っているのだろうか。ところでそれにしても女性の部屋はそんな彼女を含め異様なものであった。

五から六畳ほどのワンルーム、とりわけ目につくのは壁際に蓄積された大量のビニール袋であった。それぞれが弁当の容器や空き缶を飲み込んで丸く膨らんでいる。まるで白玉が勝手にざわざわと自己繁殖してるみたいだ、惨憺たる光景である。

部屋の中央にはママゴトのようなちゃぶ台があり、台上はノートパソコンの一人天下であった。妙にスクリーンが薄いが電源は入っていて、それはしめやかな機械音を一定に発していた。夕焼けのオレンジに照らされたディスプレイは、武器を持ったキャラクターが洞窟の中で無秩序に点在するモンスターを片っ端から自動的に攻撃している。これは『委任操作』と呼ばれる機能でインターネットゲームにみられるユニークなプレイスタイルである。プレイヤーがパソコンの前に存在しなくともキャラクターが独自に動き勝手に敵を倒しアイテムを集め成長するというシステムである。いやはやゲームの存在意義を考えさせられる機能だ。

打って変わってテレビはない。しかし洋服かけの下敷きにテレビボードが見えるので、おそらくは部屋にテレビ本体もかつてあったのである。そう、たしかに数ヶ月前まで中型テレビがボードの上

には置かれていた。しかし公共放送の受信料の支払いを回避するためにテレビは実家に輸送されたのである。だから部屋には抜け殻の土台しか残っていないのだ。ただしボードの引き出しは一箇所だけ出っ張っていて、そこには一枚の通帳とカードが剥き出しになって放られていた。

パソコン以外の電化製品はほとんどがコンセントから断切されていた。電子レンジや洗濯機や冷蔵庫の中は真っ黒である。そしてキッチンには死んでいるも同然だった。ただし辺りは空の容器によってヤケに散らかっていた。冷蔵庫にあるのは微量の調味料と空洞の湯のみである。レンジの上は海苔の空箱とプラスチックのコップが転がっている。流し台は黒ずんだまな板が置きっぱなしで、萎れた野菜のヘタがまだ残っていた。元栓の閉められたコンロにはドレッシングの容器が投げられている。排水溝にはカップ麺の容器と菜箸が突っ込まれていた。それから炊飯器はどうしてかベランダに左遷させられていた。

文明の利器がこの有様なことから、ワンルームは雑貨というモノがあしらわれているはずもなかった。もちろん横たえて動かない彼女は部屋の住人で間違いはなく、また女性の部屋であればその女性の趣味であつたり、その女性を癒したり、女性の生活を彩つたり、あるいは華やかにするための気の利いた小物や大物の一つや二つぐらいが本来はあつて然るべきである。いやいやそれは一人暮らしの男性にしても同じことか。そして、しかしそれらが無い。要はワンルームが女性が住むのに相応しい部屋ではない、というよりは。この部屋、人間が住居するのにらしい環境が整っていないのだ。否々、それは雑貨という視点に限つてのことである。

部屋の全体を見回していえば、ここは人様が生活を送るために必要な最低限の環境すら満たされていない。女性は、そんな空間で横になっていたのである。

——電子音が鳴った。それは彼女の手の中の携帯電話であつた。雷が落ちてきたかのように女性はビクリと跳ね上がった。手のひら

で振動が鈍く唸る。いそいそと彼女はスフィックスのように四足に座って、携帯に齧りつかん勢いでグイと液晶に顔面を近づけた。

ブルブルとおぼつかない指先で辛うじてメールのアイコンをタッチして即座に届けられたメッセージを表示する。否、誤って古い手紙を開いてしまい「ぐう」と女性はいきり呻いた。このタッチパネルという最先端にいまだ慣れない。それは彼女の頭が古いのではなくて、手先が不器用なのが大きかった。むろん、女性がコレを支給されて日が浅いというのも作用している。戻るボタンに翻弄され、文字の拡大を試みて、いよいよ手紙の文章が彼女に読み上げられる。

「加藤です、調布駅前です。あとアドレス登録をしておくように」

加藤さんはドレだっただろう、女性はグラグラと記憶をなぞり二秒で諦めた。頭痛がする、立ち上がろうとするが、手足に力が入らない。壁に手をついてなんとか起き上がるが、壁に寄り添うのが精一杯だった。ずるずる背中が壁を伝って下方にスライドし、結局彼女は座り込んでしまう。息が荒い、しかし呼吸を整えるのも辛い。重症だ、女性は頭を抑えて天井を仰いだ。

窓を開けると外界の匂いが識別できた、久しい感覚である。また外の匂いは情報量が大きく思わず彼女は後ずさって尻餅をついてしまふ。もう一度立ち上がらなければいけない。しかし面倒臭くなつて、彼女は脱力してその場に寝転がった。

芋虫のように地を這つてシャワールームに到着。横になつたまま脱衣し、散歩を終えた猫のように前足を上げて部屋に突入を果たした。腕をギリギリと伸ばしてなんとか蛇口に触れるとそれを必死に回そうとする。彼女は奥歯に力を込めてどうにか水道を開いてみせた。天から水が降り注ぎ、その冷たさに鳥肌が立つ。ガスを炊くのを忘れていた、この水は一生水のままである。

しかし百薫はそれを浴びることにした。秋も深まって今日この頃、冷水を浴びるのはなかなかの苦行であつたが、身体を冷やすと不思議と頭が冴えてくるのだ。修行僧が精神統一といつて滝に当たるが、

あれは案外科学的な根拠があるのかもしれない。あるいは心理的な根拠があるのだろう。百薫は立ち上がってシャワーヘッドを手に取った。石鹸はまだ残量がある、しかし慎重に使う。髪が伸びてきた、経済面を考えると長いより短い方が安上がりのはず。キューティクルに使われる人体のエネルギーアデノシン三リン酸も短髪の方が小さく済むに決まっている。今日帰ったら自分で自分の髪を切ってみよう。髪型なんてどうでもいい、どうせ見られる機会もあまりない。百薫は大学に籍を置くと同時に上京をしてきた。ところが元来消極的のインドア女であつた百薫は東京に対してなんら憧れを抱いていたわけじゃあなかった。ただ漠然と東京に住むのが正規ルートであるのだと考え、特別な決意を持ち合わせることもなく家を出てきたのである。それに両親も高校の教師もクラスの友人もそれが普通のことなのだと言っていた。母や兄弟と離れて一人になりたいという願いも少しだけあつた。だから百薫は取りあえず上京しておくことにしたのだ。

いざ足を踏み入れてみると都市は想像以上の騒がしさであつたが、それだけのことであつたく煌びやかではなかった。とにかく百薫は東京の人口密度が汚らしく感じた。三百六十度目の先には自分とは違う異質がいるのである。ちよつと玄関を開けても人がいるし、ふいに窓の外をのぞいても人がいる。それは早朝であつても深夜であつても同じことだ。そのような都会というサラダボールに慣れるのに彼女は随分と時間がかかつた。だが今でも彼女は都内の個体数に対して非効率を覚えずにはいられない。田舎に滅び行く村がある一方で都会で人口が爆発している。どうして日本国土という限られたスペースでこのような現象が起こるのであるう。――それはそちらの方が効率がいいからであろう。そして非効率と愚痴をこぼしながら、百薫はいまだ東京の個体数の一つである。

大学を入学して半年後、百薫は大学がつまらなくなって退学した。こつちの人間関係は面白くなかつた。東京の若者は隣席になつたクラスメートに運命を感じる人間がゼロに等しい。なにぶん人口が爆

発しているものだから、人は人を見て好きに選ぶ余裕がある。都会は人がタイプ分けされる傾向が強い。それは百薫にとって非常に冷淡な光景であった。大学の勉強にも退屈を覚えた。実用性の低い授業内容も退屈だったが、教授という人間がとてつもなく冷めていた。ややあ、違う。若者つまり生徒側が全員冷めているものだから、教える側もそれに合わせるしかないのであらう。いつしか大学の授業が人生において無駄な時間なのではないかと百薫は考えるようになってしまった。

それから退学をして一ヶ月後、百薫の退学という事実は情報となつて書類に化け封筒に保護され郵便により百薫の手元を飛び越して実家の方角に支障なく輸送をされた。そのとき初めて百薫の家族は百薫のやんごとなき事態を知つたのである。その後、百薫のワンルームで家族会議が行われた。母親が単身で東京に乗り込んできたのである、それは唐突のことであつた。

なんと百薫は、やつてもいない架空のバイトと東京の働き口の多さを武器にして母親を丸め込んでしまった。頭半分では実家に帰つてやり直すべきだと考えていたが、なんとも田舎に戻るのは面倒だった。家族や久しい友人に負い目を背負つて生きていくのは目に見えている。ならば東京に残つた方が自分は楽に生きていけるのである。

母親はバイトの三文字にすっかり安堵し、仕送りを半分にすることを条件に百薫が東京に残るのを許可した。後づけをするように母親は言つた。妹が東京の一流大学を目指す、さしあたって彼女は浪し予備校に通うから、仰山の金が必要なのだ。そんな妹の受験も姉が都会に残る理由として働いた。母は妹の受験を成功させることしか考えたくないのであらう、いま百薫が実家に帰るのはなにかと都合が悪いのだ。百薫は結論した、彼女は大学を辞めてから卑屈にモノを考える傾向が高まっていた。さて、百薫は無事に東京に残ることになった。もしも東京にやってきたのが彼女の父親であつたなら、また違つた結果になつていたであらう。そもそもにして娘がバイト

で生計を立てている現状に安心する母はおかしい。

なおさら現実はずっと酷い。百薫は長期バイトの経験がなかった。大学を辞めてから二、三度ほど日雇いのバイトをやったが、ある日を境に職探しすらきつぱりと止めてしまっていた。そこからの彼女の墮落は迅速であつた。

——百薫はクローゼットからジャケットを取り出した。ガチガチと歯が拍子を刻んでいる。身体を拭ったバスタオルをゴミのビニール袋の山に放り投げて彼女はシャツから上着を羽織った。ジーンズを履こうとし転倒、背中を地面につけながらズボンを履く百薫である。

調布駅まで無事にたどり着けるであろうか、もしかすると空腹で倒れるのが先かもしれない。百薫は一日と半分ほど前からモノを口にしていなかった。ドアを開けると視界が霞み、身体に重量感が圧しかかる。事故が怖いので自転車は止めて徒歩で行こう。足ならば駅前まで十五分足らずである。

どうして私は上京してしまったのであろう。薄々であるが百薫は実家を出るという時点からすでに自分がこうなることを予見していた。人間の中にはどうしても他人から指摘され命令されなければ人並みの生活すら維持せず簡単に放棄する者がいる、それが百薫である。また自分の身体に十九年間もつき合ってきた百薫自身が、それはよく知るところであつた。それなのに、どうして家出なんてしてしまったのか。それは気楽で束縛されないからだ。百薫にとって人間が生きる最低限のルールすら煩わしい。そして大学を辞めたことによつて、それが現実に叶えられる状態が完成してしまつたのだ。百薫は実質的に生きるという義務を投げ出していた。

百薫は踵を返した。どうやら考え事で道を誤つたらしい。空腹のせいか、それとも百薫という人体に難があるのであろうか、百薫は重度の方向音痴であつた。彼女は中学生の時、目的地までの直線で迷つたという驚愕の過去を持つ。つまり今のように考え事をして目的地を通り過ぎただけということだが、それだけ彼女は抜けている

ところがあつた。

自然と体軸が左右に揺れる、視界もどんどんフレームがぼやけてきた。彼女の目蓋は眼球を半分覆っている。口も半開きで彼女は思いつきり間抜け面を晒していた。じりじりと駅に向かう彼女を多数の人間がすれ違ふ。だが百薫のやつれ顔や危なっかしい足取りを気にする通行人は皆無である。自分は自分、それが巨大な都会に対する小さな自身の存在意義となる。

「おつす百薫ちゃん、お久しぶりっす」

パステルカラーの横じまセーターが百薫にズカズカと近づいてきた。のつぽで細身の若い男である。彼はセーターの袖の中に引つ込めたこぶしを上げて左右に振った。淡い虹色の繊維が鮮やかに揺れて美しい。彼は百薫の前に立つともう一つの手をポケットから出してポンと彼女の頭上に置いた。弱っていた百薫はそれだけで膝から崩れ落ちる勢いであつた。

「おわあ、なんっすか。なんっすか」

彼は素早く百薫の脇の下に腕を差し込んだ。そのまま百薫を抱きかかえる形になる。そうだ、一番若い子が加藤君であつた。百薫は加藤の名前を記憶し、ふしだらな格好から脱出しようと咄嗟に彼を突き飛ばした。百薫はそのまま後方へ倒れた。

「……………大丈夫っすか、百薫さん」

「ご、ごめんなさい。なんていうかね、お腹がね、空いてねえ、あのね——」

百薫は赤面し下を向き首を振った、それは力ない動作であつた、その声色も細々として弱々しい。加藤は苦笑し百薫の手を引いて起き上がらせた。そのまま自然と百薫を自分の腕にしがみつけさせる。それでも倒れそうな百薫に彼はため息を吐いた。

「は、鉢合わせできてよかったなあ」

百薫は安堵した。そこは都道百二十号と調布駅南口の大通りの隙間を通った一本の細道であつた。駅前と指定した割には調布駅からそこそこの距離のあるスポットだ。あまりに私が遅いから加藤君は散

歩でもし始めていたのだろうか、そう百薫は考えた。

「鈴木が言ってたんす、百薫ちゃんの高い確率でこの道を通るって、ゆっくりと加藤は歩き出した。彼の腕につかまった百薫もつられて足を動かす。砂利を踏みしだく音が聞こえた。そこは調布の駅を目前としながらマンションや一軒家の立ち並んだ住宅街であり本道に比べたら大分人が少なく騒がしさもなかった。先刻まで近所に住む学生で賑わっていた一本道であったが、しかし彼らはとうに帰宅していた、あるいは繁華街の方で遊んでいるかのどちらかだ。

加藤は携帯電話を百薫に見せた。

「さっきまで鈴木と話してたんす。もし百薫ちゃんが気まぐれな人間だったら小銭でも賭けてたねー、なんて。百薫ちゃんが右の大通りから来るか左の大通りから来るか、それとも穴馬でこの細く曲がりくねった道を使うのか。でも百薫ちゃんは穴馬が百パーセントの人間なんすね、さすがクズ代表っす、自分が穴馬であることを厭わない」

穴馬をクズと評する辺りに他人の評判を気にする彼の作家としての若い性格が出ている。この若者は新顔の物書きであった。ところが百薫は彼がなにをやっている人なのかを思い出せなかった。それは選択肢がたくさんあるからなのだ。

手品師、美容師、経営者、画家、彫刻屋、作家、デイトレーダー、ギャンブラー。これらのうちのどれかである。たしか画家と彫刻屋は同一人物だったはずだ。加藤という人間がなにかと私のことをクズと称すること、それは鮮明に記憶しているのに。しかし百薫は彼の職業が浮かんでこなかった。

「こ、この道ね。人があ、……あんまりね、歩いてないから。歩きやすいんだ、あはは。で、でも。それだけで、私をクズ扱いってー、酷いかなーって。この道、あなたたちの師匠さん。……えっと、藤原先生がいかに、通りそうな道——じゃないかなあ。なんちゃって」

んー。加藤は首を傾げて天を睨んだ。すでに日没は終了し、空は

真つ暗であつた。

「あの人がこの道を使うとしたら、それは職業病の一種つすね。あ、いや。趣味病つすかね。どーなんつしょう。藤原サンってメンドウ臭がりつすから、やっぱり大通りを真つ直ぐ歩くんじゃないつすか。だつてこの道ちよつと遠回りつしょ、あつちの道に比べて」

「わ、私も、結構のメンドウ臭がりなんだけど……な」

「ああん？」加藤が凄んだ。

「いつ、いや。なんでもないつすう、はい」

百薫は下を向いて加藤の腕に体重を乗せた、あとは彼に合わせて歩くのに集中するだけだ。空腹に倒れないように精神統一である、そんな彼女の心積もりを知ってか知らずか、加藤からの会話はなくなつた。黙つて歩く方が百薫は楽であつた。

加藤は京王線の改札口で百薫にペンギンの乗車カードを渡した。じつは藤原が直々に車を手配する予定だつたのだが、それを加藤が断つていた。それから彼は百薫に連絡を入れ、彼女が駅に来るまでの間にカードを新たに購入したのである。「あげる」と言われて受け取つたカードを百薫が改札に通してみると、残金の表示が二万円であつた。ゼロの数を確認して彼女が立ち止まり、後につかえた背広の男性が舌打ちをする。悲鳴を上げ百薫は慌てて改札を飛び出した。このカードで好きなゲームのアイテムが買える。百薫の頭上では二枚の紙幣が具体的に描かれていた。彼女はよだれを垂らしながら加藤の腕に再びぶら下がつた。

新宿行きの急行列車は仕事帰りのスーツ姿が過半である。百薫は電車に乗り込むと左右と座れる席がないか必死に見回した。刻々と極限状態が近づいていた。このままでは冗談ではなく道端に倒れる運命である。果たして生憎なことに席は満員であつた。彼女は加藤の腕を引っ張りなだれ込むようにして閉まつたドアのふちに寄りかかった。その顔は絶望に満ちている。

「うわー、顔面が真っ青つすね。……しょうがないな」

加藤はジーンズに付属したケースからピンを取り出した。それを

百薫に差し出す。片手を彼に預けたまま、もう片手で彼女が受け取るとそれは栄養ドリンクであつた。百薫は「あ、開けてくれないかな」と小ビンを加藤に突き返す。加藤は「すいませんね」とフタを開けた。その際にながった彼の腕にしかし百薫は食らいつく。その姿を見て周りの人間はどのように思うであろう。傍目には腕を組む恋人のように思えるかもしれないが、よく見ると百薫は主人に従属するペットの手前である。ようやくと百薫は栄養ドリンクを受け取った。

「ありがとう」の言葉もなく百薫は栄養ドリンクを一気に傾けた。舌先が喉仏が胃壁が酸味に弾かれる感触がする。これが生き返つたという感触なのだろうか、あまりいい感覚ではないな、すぐに百薫はドリンクを飲み干した。

加藤はポケットからハンカチを出し百薫の口端を拭いた。それからアゴ、喉、鎖骨にまで液体が垂れている。ハンカチが濡れた一筋を辿った。お構いなく百薫はビンの先を一舐めし、それを加藤に押し返した。それからハンカチに舌先を向けた、ハンカチを舐める気である。なぜか加藤は涙が出そうになつた。無意識の一挙であろうか、それとも神経を失っているのか。どちらであろうか。仕舞う場所もないので彼女に譲渡しようとした汚れたハンカチであつたが、反射的に彼はそれを自分のポケットに引込めた。

「き、几帳面なんだねえ。加藤君は」百薫はにっこりと笑った。

「ありがとす。そういう百薫ちゃんはずすね」

加藤はギリギリとビンのふたを締めた。ビンはそのまゝ彼の手に持たれる。ゴミをバックの中に入れたがらないタイプである。百薫の言うとおり、彼は几帳面である。

「け、潔癖症なのかな」

「そうすね。もしそうだったら百薫ちゃんに触るのも嫌がるっすかね」

加藤はそれから唐突に話題を変えた。

「百薫ちゃんって本読むっすか？」

「読まない。……よ、読みません」

「——そうっすか。残念だ」そう言う加藤は無表情である。

「く、クズの人間は、本なんて、読まないんじゃないかな」

「どっちかーと逆っすかね。本を読む人間の方がクズの傾向は高いっすよ」

「そ、そうなんだ。ふふーん、ふん？」

「本を書く側の人間がクズっすからね。その影響を受ける読者は自動的にクズっす」

このとき、そんな加藤の台詞を受けてようやく百薫は彼の職業が作家であることを思い出した。また彼女はそわそわとし出しワナワナと質問をした。

「ということは、加藤君も、その、クズなの？」

「もちろんっすよ。どうやら百薫ちゃんとは違うタイプのクズらしいっすが」

それっきり加藤は閉口してなにも言わなくなった。そんな彼にとつて夏目漱石は三日坊主であり、森鷗外は恥知らずである。いやいや人間のクズは一言では言い表せない。長い長い自分行儀が積み重なった集大成がクズなのであるから。ところで歴史の文豪たちは百薫のように勝手気侭なのであるうか、おそらく違っただろう。それに文豪は一人じゃなく、各々が独自の性格を有していたはずだ。それこそ一つの言葉では定義できない。

ドリンクを体内に収めたはずの百薫は新宿駅に到着するころにすっかり崩落していた。そこに加藤の「もう少し歩くかも」という言葉がトドメを刺した。彼女は地面にへたり込んでしまった。タクシ―を呼ぼうか考え、藤原の助けを呼ぼうか考え、加藤は百薫を負って歩くことにした。彼女を背負って踏み出す一歩は呪いのように段々と重圧が加わってゆく。加藤にとって重労働なんて中学校以来であった。

「胃や腸や頭や未来が空っぽのクズ女でも重いもんっすね、さすが人間」

悪態を吐き加藤は新宿ネオン街を踏み出した。新宿を歩くのは久しぶりである、彼はネオンに染まる空を眩しそうに見上げた。メンバーはもう揃っているだろうか。いまの背中の重圧のように、俺もメンバーや藤原さんにしがみついていたいけるだろうか。これから加藤は自分を磨くだけの人生である。そこに世界と他人は添え物ではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0582z/>

百の愚図と一的意思

2011年12月2日02時47分発行